

旗本伝八郎飄々日記

鈴木晴世

春の足袋



はたもとでん ばちろうひょうひょうにっ き はる た び
旗本伝八郎飄々日記 春の足袋

すず き はる よ
鈴木 晴世



学研M文庫

2012年1月24日 初版発行

●
発行人—— 脇谷典利

発行所—— 株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元—— 株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本—— 中央精版印刷株式会社

© Haruyo Suzuki 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは—— 編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「旗本伝八郎飄々日記」係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002(学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター TEL 03-3401-2382

℞〈日本複写権センター委託出版物〉

目次

第一話	春の足袋	5
第二話	無役の役	98
第三話	純情	174
第四話	かどわかし	224

旗本伝八郎飄々日記

常州大学図書館
蔵書章

春の足袋

鈴木 晴世



学研M文庫

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

目次

第一話	春の足袋	5
第二話	無役の役	98
第三話	純情	174
第四話	かどわかし	224

第一話 春の足袋

一

気がつくと、遠く雲の上にぽっこりと、富士山が見えている。

家禄八百石をいただく旗本の鳴伝しまでんぼちろう八郎は、江戸は駿河台するがだいの小川町おがわちようにある自分の屋敷の縁側から庭を眺めていたのだが、今日は朝から空が青くて、どこまでも澄みきっているせいか、庭を囲んでいる塀の向こうに、小さいがはつきりと富士の山を見ることができた。

ここ駿河台は、地名に「駿河」とつくだけあって、江戸市中のなかでも富士がよく見えるところである。

江戸の空は、毎年、春になると霞かすみ始めて、いつのまにか富士山もめったに見えなくなってくるのだが、夏が過ぎ、秋も深まって今時分になると、しだいに大気が澄み渡り、また富士が望めるようになる。

「ほれ、お内儀ないぎ、富士だ。今日は富士がよく見えるぞ」

伝八郎が声をかけると、その後ろ、座敷のほうで風呂敷を広げていた四十がらみの女が、明るい声で応えてきた。

「まあ、ほんとに……。やっぱり富士山はいつ見ても、きれいでございますねえ」

手を止めて座敷から富士に見入っているのは、神田かんだは本銀町ほんしろがねちようの二丁目にある足袋屋たびや笹野屋さのやの女将おかみ、伊都いとである。

笹野屋は、伝八郎の祖父の頃から何十年もこの屋敷に出入りしている足袋屋で、さして大店おおだなという訳ではないのだが、足袋職人である笹野屋の主人をはじめめとして、他の抱えの職人達も皆で揃って腕がよく、「笹野屋は、足にぴたりと吸いつくような履はき心地のいい足袋を作る」と、神田界隈かいわいでは評判の店だった。

嶋家では、娘の野枝のえがまだ十三で、足の成長も著しいから、春、秋、冬と、季節ごとに笹野屋を頼んで採寸をし直して、数足、足袋を新調している。

今日も伊都は、十八になる跡取り息子の千太郎せんたろうを伴って、冬用の足袋の注文を取りにきていた。

春と秋は決まりきった白木綿しろもめんの足袋ばかりで、色物といつても伝八郎の履く山歩き用の紺こんの足袋がせいぜいだが、冬は防寒用に別珍べっちん（ビロード様の生地）のものも頼むから、少しばかり目先も変わって、選えびがむらさきいがある。

伊都が座敷に広げた風呂敷の上には、紺むらさきや紫、海老茶えびちやなどの色物の別珍や、厚手の織り地の白木綿などが、生地の見本として並べられていた。

と、そのなかに、薄紅色うすべにといつてもよさそうな淡い赤紫あかむらさきの別珍の生地を見つけて、伝八郎は手に取った。

「おう。この淡い桜のような色の別珍がよさそうではないか。野枝の外履きにするには、ちょうどよからう。なあ、伊都どの、どうだ？」

「え？ あ、はい。申し訳ございません」

あわてて伊都がこちらを向いた。どうやら今、伝八郎が声をかけるまで、富士に見入っていたらしい。

「そちらでございますね。ほんとに申し訳ございません。つい、ぼうつといたしまして……」

「いや」

笑って見せると、伝八郎は持っていた別珍の生地を手渡しながら、伊都の前

に座り込んだ。

さつき屋敷を訪ねてきた時からずっと案じていたのだが、どうやら伊都はひどく疲れているようで、顔色が悪かった。

「したが伊都どの、そなた身体は大丈夫か？ 宗兵衛そうべえの世話と店とで忙しいのは判るが、あまりに無理をしすぎると、そなたまで倒れてしまうぞ」

宗兵衛というのは伊都の亭主で、笹野屋の主人である。

二年前、宗兵衛は卒中の発作を起こして危うく命を落としかけ、以来、左の半身が、ほとんど動かなくなってしまった。

不幸中の幸いにも頭のほうには支障がなく、言葉も前と変わらず話せるから、息子の千太郎や弟子の職人らを相手に、あれこれと口で指図さしずはできるのだが、自分自身は左半分、手も足も利きかないから、足袋作りはおろか、厠かわやまで歩いていくこともままならない。

元来が職人気質かたぎで、頑固がんこなうえに短気でもある宗兵衛は、半身が利かなくなつてからというものの、家の者らを相手に当たり散らすことが多くなり、なかでも自然、その矢面やおもてに立つことになるのは、着替えや食事の手伝いから厠の世話までしてやっている女房の伊都であつた。

おまけに伊都は動けない宗兵衛に代わって、笹野屋の女将として番頭とともに帳場ちやうばを預かり、店に來た客のあしらいや得意先まわりまでこなしていた。

「そなた本当に身体を壊すぞ。せめて宗兵衛の身のまわりの世話ぐらい、誰ぞ女中にでも頼めぬのか？」

伝八郎がそう言うのと、伊都は静かに首を横に振り、あきらめたような笑顔を見せた。

「他の者の手を借りるのは、どうにも嫌なようでございまして……。ああした性質たちゆえ、やはり意地もあるのでございましょう。それでも、お殿様にいただいておりますお薬のおかげか、最近は、頭が痛いひところと騒がなくなりました。本当に一頃は、頭痛がひどくて毎日荒れて、私にも千太郎にも物を投げたりいたしましたし、それを考えれば、今はもう楽なものでございます」

「そうか」

「はい」

そう言つて、伊都がまた笑つて見せた時である。

閉めた襖ふすまの向こうから、にぎやかな声が聞こえてきて、娘の野枝が千太郎を伴つて、座敷に入つてきた。

見ると、野枝は、幼い頃から大事にしていた市松人形いちまつを抱えている。

「ほら父上、ごらんください。可愛いでしょう？ この足袋、千太郎さんが作ってきてくださったんです」

野枝が突き出して見せているのは、人形の足である。

なるほど、人形は冬らしく、濃紫の別珍の足袋に履きかえていた。

「ほう。これはまた見事な足袋ではないか」

思わず手に取って眺めてみると、人形の足にもぴったりとしていて皺しわもなく、こんなに小さいというのに、まことに出来のよい足袋である。

まだ宗兵衛が元気な頃から、千太郎は跡継ぎとして得意先に出入りをしていて、この嶋家でも、父親の宗兵衛が採寸をしたり、生地合わせをしたりするのを、十二、三の子供の頃から弟子らしく手伝っていた。

その千太郎もここ数年ですっかり職人らしくなり、宗兵衛の左手が動かなくなつてからというもの、伝八郎や野枝の足袋は他の職人には任せず、千太郎が一人で仕上げている。

「腕を上げたな、千太郎。もう立派に、宗兵衛の跡を継げるではないか」

「いえ、そんな……。私など、未だいまに父に怒られてばかりで、まだまだでござ

います」

そう言つて口では謙遜けんそんしながらも、やはり十八の若者のこと、褒められて嬉しい気持ちは隠せないらしい。

とたん、いっぱしの足袋職人の顔つきになり、持ってきた道具箱のなかから採寸用の文尺もんじやく（竹製の物差し）を取り出して、野枝のほうに向き直った。

「では、野枝様。採寸のほう、よろしゅうございましょうか？」

「はい。お願いいたします」

野枝も改めて頭を下げると、勝手知つたる足袋の採寸、自分でさっさと素足になつて、座っている千太郎の前までやつてきた。

足袋作りの採寸というのは、実際、緻密ちみつなものである。

足の裏を真っ直ぐ床につけた状態で、まずは指の先から踵かかとまでの長さを文尺で測つてから、次には厚紙で作った巻き尺を使って、足の厚みを測っていく。

指の付け根の一番広いところを測つたり、土踏まずと甲を結んだ足の真ん中を測つたりと、片足につき二十カ所、左右で四十カ所も測るのだ。

その間中、採寸される客のほうは、ほとんど片足で立ちっ放しになる。

右が済み、左足に採寸が移つて、巻き尺が足の裏にまわされる瞬間、野枝は

ぐらりとして、その腰を千太郎に支えてもらっていた。

「すみません……」

腰を持たれて、野枝も十三の子供ながら、めずらしく頬を赤くしている。

「いえ、とんでもない。こちらこそ長くかかって申し訳ございません。お疲れでございますよう？　どうぞ野枝様、私の肩におつかまりください」

「はい……」

野枝はそうつと千太郎の肩に手を置いて、うつむいている。

だがそんな野枝の恥じらいには気づかずに、千太郎のほうは、採寸に真剣であつた。

「では野枝様、すみませんが、足首のほうを」

「は、はい」

着物をたくし上げて、野枝は真っ赤になっているのに、千太郎は、いっそう気づかぬようである。

思わず顔を見合わせたのは、親の伊都や伝八郎のほうで、どうも、何と言つてよいやら判らずに、互いに目で照れ笑いであつた。

二

その伊都が男と駆け落ちしたという話を、伝八郎が耳にしたのは、それから三月と経たない師走なかばのことだった。

伝八郎に酌をしながらそんな話をし始めたのは、料理屋有明の華板・伊之助である。

神田鍋町にあるこの有明は、伝八郎にとっては二つ目の家のようなもので、本草学者である伝八郎は女将の波津に頼まれて、この店の看板である本草料理膳という名の薬膳の、本草（薬）の監修をしている。

今日も伊之助と二人、年明けに出す初春用の薬膳の献立をいろいろに試していたのだが、さつきようやく膳立てが決まり、板場から波津の居間へと引き上げてきて、三人で飲み始めたところであった。

そこで伊之助から、笹野屋の伊都の話を聞かされたのである。

「なに？ 駆け落ちだど？」

伝八郎は顔をしかめた。

伊都は若い頃から名の通った美人だったから、たしかに笹野屋に嫁いだ後も、言い寄ってきた男は少くない。

だがそのたびに痛くもない腹を探られて、癩癩持ちの亭主に、「おまえに隙があるからいけないんだ」と、不当に怒鳴られていた伊都の姿をたびたび目にしてきた伝八郎は、また嫌な噂が立ったかと、不機嫌になっていた。

「伊之助。おまえ、誰ぞにかつがれておるのであろう？ 悪い冗談だぞ。おまえにそんな話を聞かせたやつにも、妙な噂を流すなど、よく言っておけよ」すると、それまで黙っていた波津が、横で伝八郎の杯に酒を注ぎながら、気の重い声を出した。

「それが伝サマ、ほんとのことなんでございますよ。実は前から噂話で聞いているはいたんですけれど、つい昨日、笹野屋の千太郎サンがうちにいらして、いろいろと話してくださいましてね」

「千太郎が？」

「はい……」

母に出て行かれてからというものの、父の食が細くて心配なので、何ぞ好きそうな物でも見繕って届けて欲しいと、千太郎が自ら頼みに来たというのである。